

ユーコン河航行距離表

日付	地名	距離	日付	地名	距離
6/7	カークス	(0km) C ₁ 0 km	7/23		C ₃₅ 28 km
9		C ₂ 18 km	24		C ₃₆ 50 km
10		C ₃ 30 km	25	ランバート	(1727km) C ₃₇ 63 km
11		C ₄ 28 km	27		C ₃₈ 70 km
12		C ₅ 37 km	28	タナ	(1847km) C ₃₉ 50 km
13	ホワイトホース	(120km) C ₆ 15 km	30		C ₄₀ 59 km
14		C ₇ 40 km	31		C ₄₁ 60 km
15		C ₈ 28 km	8/2		C ₄₂ 48 km
16		C ₉ 28 km	4	ルビー	(2037km) C ₄₃ 23 km
17		C ₁₀ 45 km	5		C ₄₄ 47 km
18		C ₁₁ 49 km	6	ガリーナ	(2126km) C ₄₅ 42 km
19	カマックス	(396km) C ₁₂ 78 km	8		C ₄₆ 28 km
21		C ₁₃ 30 km	9	ユクック	(2192km) C ₄₇ 38 km
22		C ₁₄ 61 km	10	ヌート	(2221km) C ₄₈ 29 km
23		C ₁₅ 66 km	13		C ₄₉ 25 km
24		C ₁₆ 75 km	15	カルタダ	(2285km) C ₅₀ 39 km
25		C ₁₇ 30 km	18		C ₅₁ 39 km
27		C ₁₈ 73 km	19		C ₅₂ 62 km
27	ドーソン	(781km) C ₁₉ 50 km	20		C ₅₃ 47 km
7/1		C ₂₀ 39 km	21	グレイリング	(2482km) C ₅₄ 49 km
2		C ₂₁ 78 km	22	アンピック	(2511km) C ₅₅ 30 km
3	イーグル	(956km) C ₂₂ 58 km	25		C ₅₆ 10 km
5		C ₂₃ 49 km	26	ホリークロス	(2578km) C ₅₇ 56 km
7		C ₂₄ 70 km	28		C ₅₈ 80 km
8		C ₂₅ 75 km	29	ルジアンミッション	(2696km) C ₅₉ 38 km
9	サークル	(1210km) C ₂₆ 60 km	30		C ₆₀ 16 km
11		C ₂₇ 50 km	9/1	マージナル	(2782km) C ₆₁ 70 km
12	フォートユーゴン	(1326km) C ₂₈ 66 km	3		C ₆₂ 27 km
14		C ₂₉ 22 km	4	パイロットステーション	(2859km) C ₆₃ 50 km
15		C ₃₀ 45 km	5		C ₆₄ 34 km
16	ビーバー	(1453km) C ₃₁ 60 km	6	マウンテンビレッジ	(2923km) C ₆₅ 30 km
18		C ₃₂ 36 km	8		C ₆₆ 40 km
21		C ₃₃ 45 km	9		C ₆₇ 51 km
22	スティープスビレッジ	(1586km) C ₃₄ 52 km	10	アラナック	(3034km) C ₆₈ 20 km

総航行距離 3034km
 1日平均航行距離 45.2km
 1日平均航行時間 7時間

注・ () 内は累計距離
 ・ CはCampの略である。
 ・ 休息や悪天候のために航行しなかった日は数えていない。

行動記録説明

- ユーコン河航行時の生活サイクルはおおむね下記の通りであった。
 AM 8:00 朝食当番2人が食事を作って他の隊員を起こす。
 9:00 航行開始
 PM 0:00 昼食
 ~1:00
 5:00 上陸
 6:00 皆で夕食を作る
 8:00 就寝
- カヌー3艇に、それぞれ2人ずつ乗り込んで航行する。後に2回搭乗シフトを変える。
- 基本的に街や村に着くたびに休息日を1日もうけた。(街と村の区別は人口の大小や設備や家屋や道路の整備のされ具合などを見た上で主観的にさせてもらった)

行動記録

出国・入国・航行準備

6月1日

—いよいよ遠征開始—

現役部員、関係各位の見送りをうけて出国。
大阪～ソウル（韓国）～バンクーバー（カナダ）

日付変更線を越える。

6月1日

—カナダ入国—

PM 1:30 バンクーバー到着。リッチモンドインホテルで1泊。

2日

—ホワイトホースへ—

バンクーバー～ホワイトホース（国内線）
空港からレンタカーでダウンタウンまで荷物を運ぶ。1日\$50で3日間借りる。タクホテルにチェックイン。

3日

—情報収集・買い出し—

～6日

フードタッパーやコップ・フェルセット等、
中小の装備を買い足す。値段は物が大きくなる程、安くなるように感じられた。
焚火の許可証（ファイヤーパーミット）についてR. C. M. P（カナダ警察）に尋ねるが、森の中ではなく、河原で火を使う分の許可は要らない、とのことであった。

7日

—カークロスへ—

C1

ホテルをチェックアウトして荷物を全て外に出す。そこで日本から予約した我々をカークロスまで運んでくれるバスを待つ。AM 9:00 バス到着。

40人は余裕で乗れる大型バスが目の前に停車した。荷物を手際よく積み込んで乗車する。

隊員6人思い思いにポツリポツリと着席するが、空間が余りにも広すぎて身の置き場に困る。事前の情報が乏しかった為、日本の旅行代理店に予約を頼まざるを得なかったため、100km弱の道程に96000円掛けてしまう結果となった。

ちなみに、現地（ホワイトホース）で頼めば1人\$35で済む所もあった。

1時間でカークロスへ。

カークロス

我々の出発する湖ベネットレイクのほとりの村。人は少なくゴールドラッシュ時にスカグウェイから敷かれた線路がこの村まで走っている。

湖は青く澄み渡り、その彼方に見える青い山脈の頂にはまだ白い雪が残っていた。

8日

—航行準備・自由行動—

アウトサイドに空気を入れ、他の装備についても点検し、午後は自由行動。

高木・戸谷が知り合った、村の男性の家に全員でお邪魔する。航行についての



バンクーバーの空港で荷物を受け取る



ホワイトホースでの買い出し



ベネットレイクの砂浜



装備点検中

アドバイスを受けたり、夕食を御馳走になったりと楽しい時間を過ごす。
明日からのカヌー搭乗シフトは下の通り

春日—関谷 鹿野—藤巻 高木—戸谷

航行開始 in カナダ領

9日 一湖を越える— C2 (18 km)
AM9:30 記念撮影をして出発。気温8℃で肌寒い。全くと言っていい程流れのない湖面を黙々と進む。

単調なパドリングだが美しい風景がそれを忘れさせてくれる。

10日 一湖2日目— C3 (30 km)
ベネット、レアス、タギッシュ、マーシュと4つの湖を通過するのだが、今日はマーシュレイクの入り口で上陸。テン場(野营地)で猛烈な蚊の洗礼を受ける。

テントの周りには、我々の存在を嗅ぎつけた蚊の大群がモーターボートの様な羽音を立てて飛び回っている。

11日 一湖3日目— C4 (28 km)

1日掛かりでマーシュレイクを越える。

12日 一ハイドロダム— C5 (37 km)
午前中だけで8匹のビーバーを見る。水中に潜る時に太い尻尾で水面をたたくので、すぐ発見できる。

ウォーターゲート(水門)やマイルズキャニオン(岩で出来た溪谷)を通過してハイドロダムに到着。今日は10時間漕いで、37km進む。歩くよりも少し遅いぐらいか……。

ハイドロダム

カナダユーコン準州の州都ホワイトホースの電力を支える。豊富に蓄えられた水の上には何挺ものフロートプレーン(水上飛行機)が停泊していた。

-----ここまで 113 km-----

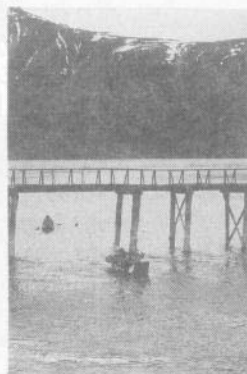
13日 一ホワイトホース通過— C6 (15 km)

朝一で右岸をポーテージ(ダムや堰堤などの障害物をカヌーや荷物を一時陸上げて越えること)。30分で終了する。

再びカヌーに乗り込み30分ほど漕いでホワイトホース着。食糧を買い出して再出発。少し下流の中洲に上陸。

ホワイトホース

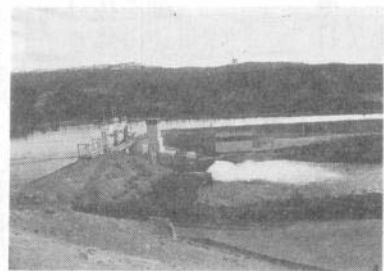
人口2万の街。ゴールドラッシュ時の史跡を展示した博物館には、ハイドロダムが建設される以前に撮影されたユーコン河の白黒写真が展示されていたが、今からは想像も出来ない程荒れた河で、何十人も乗っている大型木船が、波に飲み込



航行開始



山を背に湖を漕ぐ



ハイドロダム



ホワイトホースにて食糧補給

まれんばかりに翻弄されている様が写しだされていた。もし、その頃のユーコン河に来ていたのなら我々の航行はもっと厳しく（もしくは不可能に）なっていたのでは無いだろうか。

街の前後には、オートキャンプ場があり、スーパーやアウトドア用品店も豊富にある。銀行、ファーストフード店と一通り何でもある。カークロスとは100km違いだが規模が全然ちがう。

14日 —レイクラバージュ— C7 (40 km)

巨大な砂山と砂山の間を蛇行してカヌーは進む。昼前に、左岸側から流れ込む白い濁流と交わる。この流れ込みの支流が白いのは源流部に氷河があるからで、削り取られた細かい粒子が、水に溶けて色を付けているのだ。

丘に登って見下ろすと、河ははっきりと青と白に分かれている。（以後ずっと濁った河となる）

夕方（といっても昼並の明るさだが）ユーコン最大で最後の湖レイクラバージュの入り口に上陸。

15日 —レイクラバージュ2— C8 (28 km)

程よい追い風が吹くが、中々進まない。各艇テントのポールにポンチョを結び付けて帆を張りスピードを上げる。

午後から日差しが益々強くなる。直射日光で40℃をマーク。右岸に上陸してからは雲が出始め、時折落雷する。

16日 —再び河へ— C9 (28 km)

連日の強烈な日差しで皆体力消耗気味だ。PM2:30~3:30の間、湖の出口手前で昼寝をする。隊員には好評だった。

湖を抜け河に入り、再び水が流れ始めた。

17日 —隊員達の焦り— C10 (45 km)

テスリン河と合流する。よいテン場が無く、右岸の低く水捌けの悪い草叢に上陸。

—あせり—

計画段階で、上流部で1日60km進む予定が、予想以上に流れが無く進めない。この時点での遅れは3日であったが、先の見通しが暗いことはこれまでの航行距離を見ても明らかである。

「河口まで行けないのではないか」「そんなことは分からない」「カヌーの選択を間違えたのではないか」「いまさら遅い」など、隊員思いの意見の口にする。

3000kmのうち300km弱しか来ていない地点だが、慣れない環境にいることに対して興奮や不安を感じて、知らず知らずのうちに見えない疲れが溜まっている。

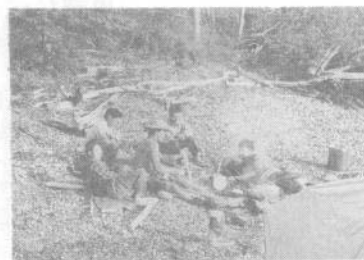
18日 —ビッグサーモン— C11 (49 km)

結局漕ぐしか無い、という単純な結論に従って、今日も我々はカヌーに乗る。

PM2:30ビッグサーモンリバーとの合流点の村ビッグサーモンビレッジに立ち寄る。昔は文字通りインディアン達がここでサケを捕っていたが、今は廃村だ。



二色に分かれた河



レイクラバージュのテン場



ポンチョを帆にする



ビッグサーモンビレッジにて

パネだけの古びたベッド以外何も無い小屋の壁は、ここに寄ったカヌーイスト達の落書きで埋まっていた。日本人のものも多く、少し驚く。

河沿いには、こうして幾つもの廃村が点在している。

19日 —カーマックス— C12 (78km)

いつも河の真ん中を進んでいるので気が付かないが、岸に寄せてみると随分スピードが出ているのが解る。

PM5:30カーマックス到着。8時間で約80km進んだ。

☞カーマックス

ハイウェイ沿いの停泊場である。グロッサリーストア、ガソリンスタンド、ホテル、レストランといったものが必要最小限整えられている。1日あれば飽きてしまう。

-----ここまで 396km-----

20日 —休息日—

21日 —出発—

C13 (30km)

朝食を摂って買い出し。12日分の食糧はさすがに多い。缶詰、じゃがいも、米が特に重い。カヌーに積む時に、食糧を詰めた防水袋のショルダーベルトが切れそうな程であった。

PM1:50に出発して3時間漕いでファイブフィンガーコールマインという昔の炭坑に上陸。

22日 —瀬を越えて— C14 (61km)

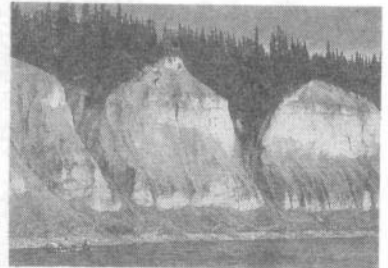
ユーコンに3つあるといわれるうち、2つの瀬を今日通過する。出発してからしばらくして、前方に赤茶けた岩が河から何本も突起しているのを発見する。ファイブフィンガーラピッドである。この名は、おそらく岩間の流れを5本指に例えたものなのだろう。ガイドブックで見た通りに右側から通過する。流速もあり波もあるが、激しさからいえば、日本の溪流の方が上である。(しかし、今年は例年よりも水量が少ないらしいので断言はできないが)

1時間後に2つ目の瀬、リンクスラピッドを通過。ここも右側から無難に通過。

PM4:00ミント着。整備の行き届いたキャンプ場で、1テントにつき\$8を支払う。

—ダニの猛威—

近ごろ、夜皆がシュラフに入って寝静まっても、高木だけは何故かモゾモゾとイモムシの様に動いて落ち着かないのである。それだけならまだしも、「う〜ん」「う〜ん」と悩ましげな声をあげるのだ。



くずれ落ちた砂山の下をいく



航行中



カークロスで買出した食糧



リンクスラピッド



ダニに咬まれた跡

気味が悪くなって、訳を聞くと体がもの凄く痒いらしい。どうやら日本の下宿からダニを連れてきてしまったらしい。

本人は春日にもらったソファから移ったダニだと、どうでもいい言い訳をしていたが、数日後関谷のシュラフにもダニが湧くなど一大旋風を巻き起こした。

23日 ー流れー C15 (66 km)

流れも恒常的にあり、昼過ぎには3艇繋げて揺られる。それだけでも1時間に6 km進む。午後は向かい風に悩まされる。

24日 ーライジャケ紛失ー C16 (75 km)

朝1枚ライフジャケットが紛失しているのに気付く。昨日昼食を摂った中洲に忘れてしまった様だ。予備で賄えたが、装備に対する充分な気遣いを再確認する。

流れが何本にも分岐し、中洲の多さも加わって地図読みに苦労する。

25日 ー沈カ (カヌー転覆)ー C17 (30 km)

速い流れにのって快適に1時間ほど漕ぐ。

山間に入った頃から俄に強烈な向かい風が吹き始める。中洲に分けられた河が再び合流し、複雑な流れをなしている。

舵がききにくい、と思った瞬間突風を受けカヌーは横を向く。荒い横波を受け左に傾くのを必死で堪える、が考える間もなくカヌーは大きく右に傾く。フワッと腰が跳ね上がったと思った瞬間、鹿野と藤巻は冷たい河に放り出されていた。

鹿野がカヌーを起こし再び乗り込むが大波をくらってまたひっくり返される。

10分弱流され、高木・戸谷艇に救助される。すぐ岸に上がりテントを立てて暖を取る。両名共、軽い低体温症状態であったが回復する。テントで昼食を摂り雨が止むのを待ちPM3:00テントをたんで少し下流に漕いで上陸。

今思い出しても危険な沈であった。

26日 ー停滞ー

食糧用テントの中で朝食。雨の為待機する。昼前に停滞決定。

27日 ー悪夢・連沈ー C18 (73 km)

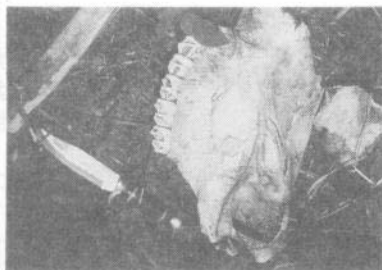
ベーリング海まで2度とひっくり返るまいと心に誓い艇を漕ぎ出し思い思いのペースでカヌーは進む。昼食後も同じくスイスイ進む。

高木・戸谷艇は左の岸沿いを進んでいる。岸といっても2mの垂直に切り立った土手で、そこに繁殖する木々の土台が河の水に削り取られた為に倒木となって何本も突き出ている。

ふと見やると、100m位離れた所にいる前座席に座った戸谷が頭から河に落ちて行くのが目に入った。一呼吸おいて、残った高木を乗せたカヌーが丸ごとひっくり返った。

戸谷はすぐに倒木を伝って土手に登ったが、高木は黒光りするカヌーの船底につかまったまま流されている。すぐ手を貸しにいくが結局そのままの格好で最寄りの中洲に流れ着いた。

100m位上流に残された戸谷を空荷のカヌーで迎えにいったり、1つだけテントを立ててストーブで暖を取る。2人共すぐ河から出たのと、天気が良かったのとでダメージは少なかった。原因は倒木に引っ掛かってバランスを崩した為であるらしい。



ムースの骸骨



沈んで濡れた装備



転覆直後

しかし、相次ぐ沈に隊員（特に隊長）らの気分は重い。カヌー乗りにとって「沈」は避けなくてはならない、しかし常に付きまってくる問題である。それは、時として命さえも奪う。現に何人ものカヌーイストがこのユーコン河で命を落としている。だから、いつも心の安全スイッチをONにしておかねばならない。

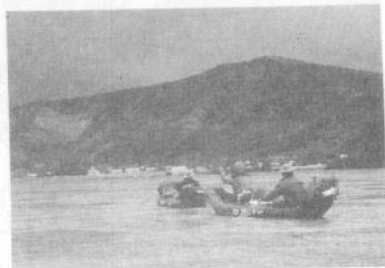
春日はこの事態を重く見て「もしあと1回、こういう事が起きたら遠征は中止する」と断腸の宣言をする。計画立案者である春日にとって、この発言がどれほど不本意であるか察して余りあったので、その様子を楽しそうにビデオ撮影していた関谷以外の転覆組は一同うなだれていた。

この沈で、戸谷は大切なジッポライターを河に寄付してしまう、高木は小物は失ったものの2万3千円のヤッケは拾い上げられてホッと胸を撫で降ろしていた。

そこから1時間漕いで砂地に上陸。

28日 ドーソン到着— C19 (50 km)
昼食のパンはジャリジャリして食べられたものではなかった。昨日のテン場が砂地で風も強く、沈で濡れたパンを乾かしていた上にかかったのであろう。

PM2:00右岸にドーソン発見、対岸のキャンプサイト（キャンプ用に整地された場所）に上陸。1日1テント\$8を払う。



ドーソン到着

ドーソン

ゴールドラッシュ時代に最も栄えた街。今では初老の夫婦など観光客でにぎわっている。ここにはカナダ・ユーコン準州唯一のカジノがあり、我々も偵察にいったみた。入場料\$4.75でブラックジャック、ポーカー、ルーレット、スロットマシン等（1回の掛金だいたい\$1~5ぐらい、ただしルーレットは別）がある。

面白いことに、びしっときめて場をしきっていたディーラーのお姉さんが次の日郵便局の窓口で働いていたりする。どうやらカジノは公営で、ディーラーはいわゆる「公務員」であるらしい。

ここでは他に、美しい女性のカンカンダンスも見ることが出来た。娯楽の少なかったであろうゴールドラッシュ時代に採掘師達には足繁くこのカジノに通ったのだろうか。

-----ここまで 781 km-----

29日 一休息日—

各自、好きなように過ごす。洗濯をしたり、シャワーを浴びたり（街や村には大抵ランドロマットという共同の洗い場がある）食べ物を食ったりして個人の趣向にあった過ごし方をする。

テン場から街へはフェリーが出ていて24時間、人や車を渡しているの、それを利用する。



フェリーで移動

30日 一休息日2—

食糧と沈で失った装備を買い出しに行く。パドル3本（1本\$24）、ライフジャケット3着（1着\$50）購入。トラベラーズチェックも全て現金に変える。（ここより下流はネイティブの村になり銀行もなくなり、現金を持っていた方が便利であろうとの考えで換金したが予想ははずれ、ほとんどの村で買い出しをする時はトラベラーズチェックを使うことが出来た）

源流の湖から800kmちかく漕ぎ進んできた。河の広さ、景色の雄大さ、どれを取っても自分の概念を吹き飛ばす位スケールが大きい。時には自らの存在をも見失う程の世界にいることを、カメラを漕ぐことによるのみなんとか認識している様な毎日だ。

しかし、それとは別に心の中に「なにかもの足りない」気持ちがある。それはカナダ領内の各場所に英語で書かれた説明の立て看板があったからか、行く先々で出会う人々が白人ばかりだからか、それとも我々以外にカメラで下っている人を見かけたからであろうか。どれが理由か解らないが、とにかく明日もベーリング海を目指してカメラに乗るのだ。

明日からのカメラ搭乗シフトは下の通り

春日—戸谷 鹿野—高木 藤巻—関谷

7月 1日 —カナディアンデー— C20 (39km)

今日、街は国立記念日でお祭りであった。パレードを見に行きたい隊員だけが見に行ったが、こじまりとしたものだったらしい。

PM1:50 出発、照り返しで水面がキラキラして眩しい。

PM4:00 フィフティーンマイルリバーとの合流点に上陸。



浅瀬をゆく

2日 —強風— C21 (78km)

カメラを繋げて休憩したままでも進む。

夕方、流れ込みの沢で水を汲む。本流の水は濁っているし、細菌の心配もあるので極力飲まないようにしていた。

テン場は中洲の砂地。就寝用テント2つと食糧用のテントを1つ立てている最中、突風が我々を襲い立てたテントが吹き飛ばされて転がって行く。砂が腿や顔を弾いて痛い。これが、地元の人達という「ワイルドウィンド」であろう、一瞬のうちに水面に波が立つ。



ワイルドウィンドがテントを飛ばす

3日 —国境越え— C22 (58km)

正午ごろ、国境線上(141°)で昼食。この線の向こう側はアラスカである。時計を1時間遅らせて時差を修正する。

50万分の1の地図上には北から南へ太く真っすぐな線が走っている。

その見えない線の上に我々はいる。しかし周りの景色が急変する訳でもない。さっきまで下ってきた河が相変わらず横たわっているだけだ。

国境警備隊員がいる訳でも、金網が張ってある訳でもない。(その必要もなさそうだが)我々の持つ「国境」というものに対する勝手なイメージは全然役に立たない。ただ、いえる事はユーコン河はどれだけ月日が流れても、自然の掟のみに従ってその姿を変えて行くということだけである。

PM3:30 イーグル到着、人気の無い土手にテント設営。



国境で時差を修正する



イーグル到着

ビジターセンターまで入国スタンプをもらいに行く。もうすぐスタンプマンが来るからと言われながら1時間程待たされる。PM5:00までの開館時間を過ぎても彼は来ないので、明日再び来ることにする。ビジターセンターのおじさんはボランティアでこの仕事をしているそうで、村の人口や様子について尋ねてもよく解らないを繰り返していた。ここは、単純に旅行者の為だけの建物のようだ。

夕食は「リバーサイドカフェ」という喫茶店の様な所で摂る。一通り飲み物と魚の白身フライやフライドポテトやハンバーガーといったファーストフードを頼むことが出来る。

食事中、我々の席に、眼鏡を掛けた体格の良い、にこやかな男性がやって来た。一同「?」と思っていると、彼はスタンプを取り出してみせた。入国審査官である。皆パスポートを携帯していたので、食卓の上で押してもらった。6人分押し終えると、彼は笑顔を残して去っていった。とても感じの好い人であった。



入国スタンプをもらう

アイーグル

人口160の村、白人が多かった。食堂といえば、我々が行った所ぐらいであろうか。グロッサリーストアには一通りの食糧が備わっているが、他の村と比べると値段は少し高め。

-----ここまで 956 km-----

アラスカ航行

4日 一休息日・独立記念日—

今日はアメリカの独立を村全体で祝う日である。村人は皆議会所の前に集う。

AM10:00村長のお話で祭りが始まる。国歌斉唱、続いてパレードだ、小学生や幼年の子供達を中心となって、足長おじさん、バットマン、ピエロなど思い思いの扮装をして200m程の砂利道を練り歩く。

とてもこじんまりとしたパレードであったが、楽しそうに行われていた。我々の参加出来そうなものが無かったので、テントに引き上げる。

午後からは射撃大会があり、対岸に置かれた的を村人がライフルで射っていた。

そこは、昨日テントを張ろうかとしたが結局思い止まった場所であった・・・。

5日 一しょぱいパン— C23(49km)

PM0:00買い出しをして出発。休養を充分に取ったので、パドルが軽い。

今日はテン場に着いて、夕食が済んで



パレード



グロッサリーストア

からパン作りに挑戦する。粉を水で固めに溶き、鍋に敷いて弱めの焚火で熱する。30分で見事な色合いに出来あがった。ふっくらとして、とても好い感じだ。

食欲をそそられ、試食してみる。口にいれると同時に、私はそれを吐き出した。とてもショッパイのである。

砂糖を入れ、再び作り直すがやはりショッパイ。粉の袋を良く読むとホットケーキの様に油を沢山使って揚げなくてはいけないようだ。

粉を大分無駄にして、ようやく食べられるものが出来た。失敗作は河に流す。

(人が食べなくても熊が食べに来るかもしれないので)



生地をこねる

6日 ー浸水ー

朝4:00頃、小用の為テントから出た戸谷が何事か叫ぶので見ると、遠く離して立てた食糧用テントの辺まで河の水が来ている。晩からの雨で、俄に増水したらしい。慌ててテントを別の高い場所に移す。就寝用テントはもともと高い位置に立てていたので問題はなかった。

午前中雨が降り続き停滞決定。



焼き上がりのパン

7日 ー疲労ー

PM5:00上陸、テント設営と同時に皆寝る。あっと言う間に1時間経ってしまい、まだ寝足りない。

ちょくちょく休息が入っているのだが、体の芯からの疲れが溜まっているのだろうか。



食糧テントが浸水する

8日 ームース発見ー

向かい風吹きすさぶ中を進む。前方に何か不自然な物体を見つける。少し漕いで近寄って見つめると、それが2匹のムース(へら鹿)であることがわかった。

角を持っていないので雌であろう。音を立てないように静かにパドルを動かして近寄るが、あと数10mというところで逃げられてしまう。陸に上がったムースは牛のように立派な体格で大変美味しそうであった。



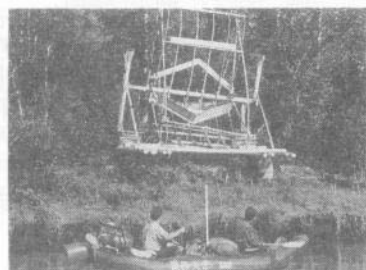
ムース発見

9日 ーサークル到着ー

航行中、用便の為に土手に上がると、どこの草叢から来るのか太い針を持った蚊の大群に囲まれる。カヌーに戻ってもしばらく付いて離れないのには参った。

すでにユーコンフラットに差し掛かっているのだろうか。我々の周囲にあった小高い崖や山々は視界から消えて無くなり、見渡す限り180°遮るものの無い青い空と白い河の世界である。

インディアンらしき人々のモーターボートが気持ちいいスピードで我々を追いかけていった。そこからしばらく漕いだ



フィッシュホイール

所にサークルがあった。

● サークル

アサバスカンインディアンの人々と多く交流する。その顔立ちには日本人に通じる部分もある。

グロッサリーストアにあった村の歴史を綴ったアルバムを見ていると、何十年も前に、河の水位が10m上昇して村が水浸しになった事があるらしい。その時の様子が色褪せた写真に映しだされていた。

-----ここまで1210km-----

10日

—休息日—

PM6:30 関谷、戸谷と3人で約束の場所に行く。昼間サーモンの切り身を売っていたオジサンに頼んで、サーモンを取る現場へ連れていってもらふ約束をしていたのだ。

我々が行くと、オジサンはもう一人仲間らしき人を連れて、既にモーターボートに乗り込んで待ってくれていた。

ボートで10分くらい下流に仕掛けた罟（のちにフィッシュホイールと呼ばれている事が分かる）の中には大小20匹ぐらいのキングサーモンが横たわっていた。1日30匹位ずつ捕れるそうだ。

テン場に戻って、他の3人も仲良くなったインディアンファミリーのボートに乗せてもらっていたことを知る。

彼らと酒を呑みながら時間を過ごす。九州出身で産湯に「鬼ころし」を使われていたのでは、と噂される高木は他の隊員がテントに入ってからAM0:00頃まで地元民達と酒を酌み交わし歓談していた。

ようやくテントに帰って来た高木は既に酩酊状態で、横になってからも唸り声を上げたり酒臭いゲップを連発しながら転がりまわるので、目を覚ました関谷からシュラフ越しにパンチを入れられていた。

11日

—二日酔い—

C27(50km)

今朝は私と高木が朝食当番なのだが昨夜の深酒がたたなり、高木はゾンビの様な顔色をしていたので寝かしておいた。

パッキングを終え出発する時も、1人では動けない高木は皆に抱えられてカヌーに乗せられる。しかし、こんな状態になってしまっても、笑われこそすれ誰にも嫌な顔をさせないのは一重に彼の人物のなせる技である。

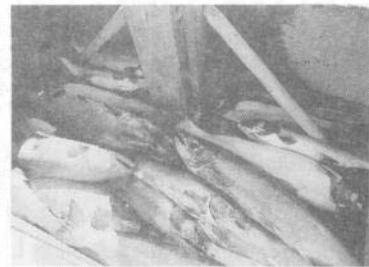
出端に昨日のオジサンからキングサーモンをまるごと1匹もらう。



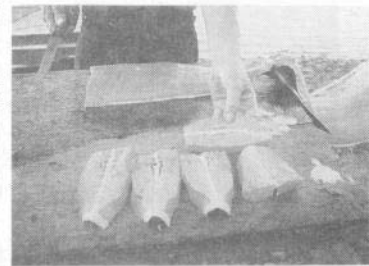
浅瀬に引っ掛かる



ボートでサーモンを回収に行く



捕えられたサーモン



切り分けられたサーモン



アサバスカンインディアンと

午前中は3艇繋げて、両端の4人か漕いで進む。高木は時々苦しそうに嘔吐する。無数の中洲の間を蛇行して行く。今日も雲一つ無い天気で、強烈な日差しが肌を焦がす。

夕食はサーモン三昧で、焼いて煮て揚げてもまだ身が余る。

12日 —フォートユーコン— C28 (66 km)

北上するに従って、どんどん日差しがキツくなっていく。夜はAM0:00でも太陽がみえ、一番日の落ちるAM2:00~3:00でも夕暮れ並の明るさなのだ。つまり、頭上を太陽がグルグルと回り続けている状態なのである。

途中、鹿野・高木艇がフィッシュキャンプによるが、トランシーバー交信の手違いから約3時間他艇とはぐれる。

PM6:30フォートユーコン到着、街の対岸の中洲にテント設営。

フォートユーコン

北極圏の街。印象深かったのは、街で出会った日本人のオバサンで、旦那さんの仕事の関係でここに昨年辺りから住んでいるという人であった。日本語でユーコンの生きた話を聞くことが出来ると思うと嬉しくなり「ここでの暮らしはどうですか」と早速質問してみることにした。

するとオバサンは明らかに顔をしかめて何故か声をひそめて頭を横に振りながら「ダメね、みんな昼間っから酒を飲んでるし赤ちゃんにはミルクの代わりにポップ（ジュース）を飲ませてるらしいし。だから河に落ちたりしたらすぐに死んでしまうわね、泳げないし酔っ払ってるしで、ライフジャケットもつけてないのよまあそれを買うお金でビールでも買うんでしょ」と本当とも冗談とも判断しかねる答えが返ってきた。内容は全てここに住むアサバスカンインディアンについて述べられたものである。

私にはどうも引っ掛かった。確かに事前に調べた書物等にはインディアンについて「酒を好み、時として暴力的になることもある」とあった。そういう人も見て来たが、毎日フィッシュキャンプで働いていたり、道を歩いていたら迷子になってないかと聞いてくれる人もいる。なかには酒もタバコも一切やらないと言っていた人もいた。航行中に私の中で育った印象は良好な物だった。

だが村々を短期間の滞在で移って行く我々よりも、このオバサンの方がより多くの事実を見ている事は確かであろう。それに特に我々は楽しいことや珍しいことを求め旅している。これはユーコンで「暮らす」者と「旅をする」者との決定的な意識の相違である事を引っ掛かりながらも感じた。

飽くまで私は通り過ぎて行くだけの異国人だがその目でもってこれからもユーコン河を見て考え話していこうと思う。

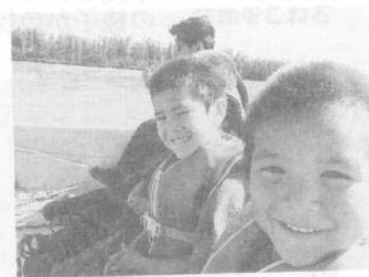
-----ここまで1326 km-----

13日 —休息日—

昨日、着いてすぐ街の人の家で水をもらう。その時サークルで教えてもらったアサバスカンの言葉で、「マシチョウ（ありがとう）」という、クラブのOBのM氏に似た、鼻髭を生やしたお兄さんは目を剥いて、「こいつら俺達の言葉を知ってるぜ」と驚きながら喜んで叫んだ。



動けない高木をカヌーにのせる



フィッシュキャンプの子供達

アサバスカン達は仲間内では自分達の言葉を使うが、それ以外では英語を使うらしい。学校でも子供達は英語を主体的に教えられているようだ。

14日

—スモーク挑戦—

C29 (22km)

AM9:00起床。個装だけまとめ、テントは張ったままで中洲から街にでる。人がいる様に見せ掛けるためアウトサイドを1艇置いていく。(汚い我々の荷物をもっていく人はいないと密かに自負してはいたが)

レストランで朝食を摂り、グロッサリーで少量の食料を買い出して戻る。

パッキングをして正午、再出発。PM1:00頃、右岸の中洲に人を見つけ上陸する。家族でフィッシュホイールを製作していた。そこでキングサーモンを一匹もらう。

PM3:30左岸のフィッシュキャンプによる。おばさんや女の子が多く、また元気が良い。なかにサングラスをしたエスキモー男性がいて、彼は1967年ベトナム戦争で両膝を失ったそうだ。日本にも行ったことがあるよと言っていた。

PM5:00中洲に上陸、もらったキングサーモンやホワイトフィッシュを捌く。6人で食べ切れない身は、スモークにすることにした。

魚と大盛りスパゲッティーで腹を満杯にして寝る。幸せなのは横になった瞬間だけで、日が低くなるまでの数時間は目を瞑って暑さと蚊の羽音に耐えなくてはならない。どの隊員の顔も日焼けと埃で目の周りが黒くなりギラギラとした顔付きになっている。

15日

—ブッシュファイヤー—

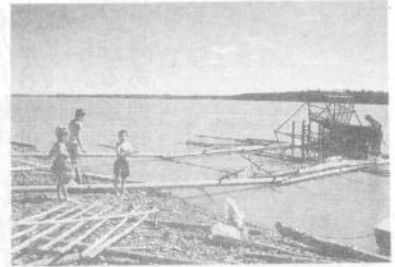
C30 (45km)

ここ1週間ほど、快晴続きで隊員の体力が落ちてるのが立ち振る舞いからもわかる。朝起きて、テントからでて日光に身を晒すだけでクラッとする。

しっかり休息時間をとっているが白夜の為日照時間が大変長く、じっとしているだけで体力を奪われてしまう。

昨日、バッテリー切れのためにエンジンをかけられなくなって漂っていたアサバスカンのモーターボートに我々の無線のバッテリーを貸したので、下流にあるフィッシュキャンプに立ち寄って返してもらう。

昼過ぎ、右前方の陸地に異常を発見する。その辺りだけ、真っ黒で枝のない木が林立している。真っ青な空に突き刺さるようにそびえる木々は異様な美しさを持ち、同時にここが火事跡であることを雄弁に物語っていた。



フィッシュホイール製作中



フィッシュキャンプの人々と



スモークサーモンに挑戦する



疲れて眠る隊員たち



ブッシュファイヤーの跡

16日

—ビーバー到着—

C31 (60 km)

晴れば軽く30℃を越えるユーコンは曇ればすぐに10℃を割る。前日はTシャツ1枚でも暑かったはずが、次の日は長袖にヤッケでも寒いということはよくある。(8月中旬以降はほとんど10℃前後の日が続くが、このころは天気が良好で、大抵の日が20℃後半の気温だった)

☁

とき

とき

☂

少し肌寒い曇り空の下、上着を羽織ってカヌーを漕いでゆく。

PM3:30ビーバー着。河原にいた強面のおじいさんにテントを何処に立てたらいいか聞くと、自分の家の前の小屋の横の草の上を使っていいといってくれた。

小屋の中には昨日ここに到着したという京都の大学生の奥山君がいた。去年ホワイトホースからここまで1人でファルトボート(折り畳み式カヌー)に乗って下り、今年はビーバーから河口まで漕ぐそうだ。彼は日本に就職活動を忘れてきてしまったらしく、とてもさっぱりとした顔をしていた。以後ヌラトまでよく行動を共にする。

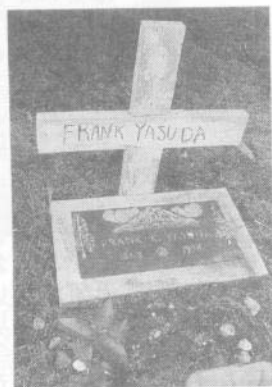
☞ビーバー

「アラスカ物語」(新田次郎著)で宮城県石巻出身の日本人フランク安田が建てたといわれるエスキモー村。ここ以降エスキモーの人口が増えていく。

-----ここまで1453 km-----



ビーバー到着



フランク安田の墓

17日

—休息日—

例年になく今年は暑いらしく昼間は村の砂利道を歩く人々をあまり見かけない。皆、家にもっているようだ。

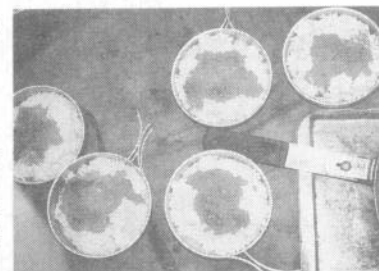
18日

—イクラ丼—

C32 (36 km)

買い出しをして出発する時、河原でサーモンを捌いていたオジサンに筋子と切り身をもらう。その場でピンに詰めて醤油に漬ける。晩はイクラ丼、約2人腹を下す。

☁



イクラ丼

19日

—停滞—

明け方から強風がテントを揺さぶる。河の水面も風に押されて逆流している。今日は停滞。

☁

20日

—未だ風止まず、停滞—

昨日一日中吹いた風は、未だなお止まない、こんな時に漕ぎ出してもアウトサイドは風をもらに受けて進まない。

☁

料理は水溜まりのものを汲んで使う。

21日

—向かい風—

C33 (52 km)

少々向かい風は無視して出発。だがやはり、スピードは明らかに出不い。黙々と漕いで中洲に上陸。

☁



停滞中

22日 —スティーブンスビレッジ—C34 (52km)

PM4:00頃スティーブンスビレッジ到着。隊員達が村に到着する度に必ずする事の一つにグロッサリーストアに駆け込むという行為がある。沢山食べ物を置いているのが良いグロッサリーで、その評価がともすると、その村の評価につながり兼ねない。

☞スティーブンスビレッジ

1日しかいなかったので印象は薄い。静かな村であった。買いだしのとき、店に置いてある肉を買おうとしたら、これは私達家族の食料だから売れないといわれる。大きな冷蔵庫の中身の殆どは非売品であった。結局この村で調達できたのは少量のソーセージとジャガイモと小麦粉であった。

-----ここまで1586km-----

23日 —天然冷蔵庫— C35 (28km)

本来なら休息日だが、テン場が狭く傾いて居心地が悪いことや、グロッサリーストアに食糧が少ないの手持ちの食糧が次の村まで充分あることから出発することにする。

出てすぐに二俣に分かれた水路で春日・戸谷艇と離れる。数キロ先の合流点で会えると思っていたが、見渡しても前後見える限りに姿はない。そこから1時間漕いで上陸しておくことにする。30分遅れて春日・戸谷到着。奥山君も一緒である。

夕食後、奥山君のファルトを借りて反対岸のフィッシュキャンプを訪れる。おじいさんおばあさんにその娘であるおばさんの3人で営むキャンプであった。ここで驚いたのは、地下5mまで掘り下げて作られた天然の冷蔵庫である。梯子で降りてみると薄暗い6畳ほどの空間に飲み水や肉が置いて冷やしてある。永久凍土を利用したクーラーは2~3℃と思われる位涼しかった。



地下冷蔵庫



ドライサーモン

24日 —パイプライン通過— C36 (50km)

昼前、北極海からの石油を運ぶパイプラインを越える。この辺りから風が強く吹き始めた為、岸沿いをゆっくり進む。

午後には晴れ間がもどり、右岸に上陸。

☞トランス・アラスカ・パイプライン

北極海に面したブルドーベイから、南のアラスカ湾に面したバルデーズまでの約1280kmを結んでいるのがこのパイプラインである。人口建造物としては万里の長城に次ぐ長さをもつ。製作費用は2兆3100億円で、1日60万バレルの石油を流す。

壊れやすいツンドラの環境を傷つけないように、ファイバーグラスのカバーで覆ったりカリブーの移動コースにあたる場合は橋を架けたり、地面に埋めたりされている。

ブルドーベイで石油が発見されたのは1968年だったが、グリーンピースなどの反対で1973年のオイルショックで世論に後押しされるまで本格的な着工は待たなくてはならなかった。



パイプライン

25日 —ランパート到着— C37 (63 km)
 流れの速さも手伝って、向かい風にもか
 かわらず順調に進みPM4:00にはラン
 パートに到着。

夕食後、子供らが遊びに来る。始めは
 もじもじしていたが、相手にしてもらえ
 ると思うと調子にのってくる。しまいに
 藤巻はラーメンを持ち逃げされ、カラビ
 ナ(接続金具)も2、3枚もっていかれて
 しまった。(次の日藤巻、高木が取り
 戻してくる)

ランパート

インディアン系の人が多く、また大人は
 酒が好きである。グロッサリーではビー
 ルを売っているが、店頭販売はしていな
 いという奇妙な状態である。というのも
 勝手にもっていく人がいるからだという。

26日 —休息日—

各隊員、思い思いに時間を過ごす。村の
 兄さんのボートで対岸の小川に釣りにい
 き、藤巻がグレイリングを釣り上げる。
 川床にムースの角が沈んでいたので引き
 上げようと試みるが、重いのと水が冷た
 くて心臓が止まりそうなとで断念する。

夕食後、テン場にジーンという村の女
 性がウィスキーの入ったコップを手を持
 ってやってきて、皆で焚火を囲んで話す。
 そこら辺に生えている草を持って来て
 煮て飲むと風邪に効くとか、これは虫刺
 されに効く等と教えてもらう。

ジーンは1人でどんどん飲んでしまい
 最後にはフラフラになってしまい、家ま
 で送ることになった。

27日 クマ発見!! C38 (70 km)

一旦パッキングしてカヌーに乗って10
 0mほど下って買い出しをする。食料を
 積んで出発する時、奥山君に教えられ対
 岸にブラックベアを発見する。安全な距
 離をとり観察する。最初1匹だったが茂
 みからゾロゾロと合計4匹の熊が姿を見
 せる。人の3倍を軽く越える巨体を丸く
 して魚を貪っている。カヌーの上から見
 ている分には危険はないが、テントにい
 るところを襲われたらと思うとゾッとす
 る。

昼食後、最後の瀬ランパートラピッド
 を越える。流れは複雑で大きなエディが
 できているが、波は高くなく問題なく通
 過する。

瀬のすぐあとにあるフィッシュキャン
 プに寄って一服させてもらう。

28日 —タナナ到着— C39 (50 km)

タナナまで60kmほどである。6時間漕
 いでタナナに到着したので流速10m/h
 前後ということになる。



ランパートの子供達



ランパートの夕焼け



村の女性と歓談中



ブラックベア発見



タナナの路上にて

タナナ

人口500人弱で白人が多い。学校は立派で幼稚園から高校まで含まれている。図書室にも幅広い範囲に渡って本が揃えられている。

小学校高学年～中学生の年代が多いようで、日が落ち始めるとどこからともなく子供たちが現れる。我々のテントの周りにも30人くらいの子供らがやって来て収拾がつかなくなったが、戸谷がブルースリーの真似をして子供らの尊敬を集めて言うことを聞かせる。



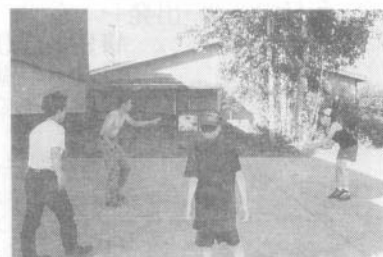
タナナのテント場

----- ここまで1847km -----

29日

—休息日—

小学生の2人組相手にバスケの試合をする。こちらは入れ替わり立替わり選手交代をするが、結果はトリプルスコア以上の惨敗であった。やたらに上手であった。



バスケのうまい少年たち

30日

—ナ ッ ツ—

C40 (59km)

朝は露が下りて少し寒くなっている。15℃ぐらいか。だが日中はまだまだ20℃後半で暑い。今まで特筆こそしなかったが我々は常に蚊に刺されながら河を下ってきた。何をするにも必ず体のどこかを搔かすにはいられないのである。

近ごろ、そこにもう1種類愉快な仲間が登場した。その名前は「ナツ」である。いわゆるブヨで名前こそ軽妙だが、タチは蚊よりも体が小さく且つ行動単位が多いので、一度目を付けられたら、数10匹に囲まれ耳、鼻、穴という穴に侵入して猛威をふるう。そして咬まれると肉をちぎられる様な痛みが走る。

また、テントの網目からも入ってくるので朝天井をみるとナツがびっしりと張り付いていたということもしばしばであった。

31日

—猛暑—

C41 (60km)

夜ナツ&蚊に熟睡を妨げられる。

日差しが猛烈に強く、直射日光で44℃をマーク、日陰でも30℃ある。堪らずカヌーからおりて水浴びをする。ユーコンの冷たい水で両肩にのしかかるような暑さを振り払う。

途中きれいな小川で水を汲んでいく。



炎天下を漕ぐ

8月 1日

—停滞—

朝からの雨で久々の停滞。普段カユさと暑さで熟睡できない為であろうか、皆午前中はよく寝る。

2日

—足跡だらけ—

C42 (48km)

向かい風強く波も荒く慎重に進む。なぜか水温18℃と普段より高い(普通12℃～13℃)地図上では数km先に温泉のマークがあるがその影響だろうか。

コクリネスという廃村に寄るが、何もなかった。右岸にあったフィッシュキャンプにも少しだけ寄る。

テント場の周りには、熊や狐の足跡が沢山ある。少し奥に入った所で春日がビーバーを発見。



熊の足跡

3日 —停滞—

雨で停滞。

4日 —ルビー到着— C43 (23 km)

2時間漕いでルビー到着。

● ルビー

急な山合いの斜面の上に家が点在している。坂道の急さと多さに、長崎を思いだしてしまった。

-----ここまで2037 km-----



ルビー到着

5日 —出発— C44 (47 km)

AM9:00遅めの朝食を摂って出発。目の前の山の裾に、白い帯のような霧が掛かって、とても幻想的な風景をつくりだしている。

航行中も、テン場に着いてもナッツに付きまといわれてうっとうしい。今日、右岸で小屋の周りの草刈りをしていた人の話では、あと1~2週間程度で、蚊やナッツはいなくなるらしいが・・・。

6日 —ガリーナ到着— C45 (42 km)

曇り空の下漕ぎ出す。所々に小屋が建てられている。これらの小屋は、冬期にはハンター達に開放される重要な設備である。PM3:00ガリーナ到着。

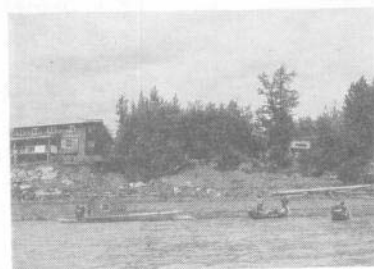
● ガリーナ

人口900人弱と大きな街だが人通りは少ない。隣には米軍の基地があって、広い滑走路を持っている。我々もカヌーに乗ってる間に戦闘機を見た。

-----ここまで2126 km-----



煙でナッツを追い払う



ガリーナ到着

7日 —休息日—

鹿野が夕食に腕を奮い、手の込んだカレーを作る。が、まずくて隊員はあまり食べない。横で遊んでいた子犬にやったら食べたが、喉を掻き箸って悶えていた。

スイスから来た白髪、白髭のおじいさんがシーカヤック（海用カヌー）で到着した。タナナで子供に斧を盗まれ、犬にスプレースカート（カヌーのカバー）を食い千切られたと嘆いていた（3回程聞かされる）

—先輩の話—

おじいさんの名はフィッシャーといい、子供が3人いるという。話し好きで放っておくといくらでも喋るといった感じだが、とにかく陽気な人である。喋っているうちに家族の話題になった。

すると彼はいきなり、私の肩を掴んで「私は、息子達とカヌーで一緒に旅をする。これはとてもいいことだ。」「もし将来君が結婚して子供ができたら、金や物を与えるよりも君の時間と愛を分けてあげなくてはならない。」と言い聞かせるように喋った。突然話の調子が変わったので面食らったが、言いたいことはよく分かった。こんな話も同じ河仲間だからできるので



食事中

はないだろうか。一瞬、探検部の先輩と話しているような錯覚に陥ってしまった。

8日 —シフトチェンジ— C46 (28 km)
AM 11:00 買い出しをして出発。
今日からのシフトは次の通り。

春日—高木 鹿野—関谷 藤巻—戸谷

9日 —ユーコンは海の底?— C47 (38 km)
珍しく追い風で気持ちよく進む。途中で
イェストロウという村に寄る。村のおじ
いさんに付近を案内してもらう。

フィッシュホイールが仕掛けてある所
は切り立った岩壁の下で、我々の足元
には、壁から落ちた瓦礫が積もっていた。
これは金の試掘のために削られたものだ
と説明しながら、おじさんは足元の石の
一つを拾い上げて見せてくれた。

そこには貝の模様がくっきりとついて
いた。化石である。我々は一斉に足元に
視線をそそぐ。

貝や木の葉や芋虫のような生き物の化
石がゴロゴロしている。ここも昔は海の
底だったのだろうか。

PM 3:30 コユクック到着。

☐ コユクック

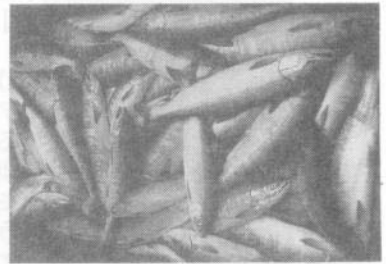
道で出会った、シシリアという妊婦に「集会場
でパーティーがあるから何か食べ物を持
って来なさい」と言われた通り、PM 6
:00 に我々も食糧タッパーの中から粉
末ポテトやタマネギ等貴重な食材を持
参する。

集会場に行くと、村人は各家庭から魚
の煮物や、スパゲティ等アツアツの料
理を鍋に入れたまま持ち寄っていた。我
々とはとっさに手に下げたビニール袋を
後ろ手に隠して初めて、材料ではなく「
料理」を持ってこなくてはならなかった
ということに気が付いた。

このパーティーは打ち上げの様なもので、
ついさっきまでこの場所ではネイティブ
ライト（先住民の権利）についての集会
が開かれていたそうだ。年2回、10余
りの共同体の持ち回りで開催される。し
かし、周りを見渡してみると、色々な顔
付きの人がいる。ここでいう「ネイティ
ブ」とは「先住民」というよりは「そこ
で暮らす人」と訳した方がよさそうであ
る。それほど皆多種多様な顔付きをし
ている。会議の内容は言葉がよく解らな
かったので判明せず。しかし、道であ
った村人が「コユクック」と村の名が
印刷されたTシャツを着ていたのには
奇異な印象を受けた。観光客が来るよ
うな所でもなさそうなのに何故にこん
なTシャツが存在するのか、ユニホーム
みたいなものだろうか。

-----ここまで2192 km-----

10日 —ヌラト到着— C48 (25 km)
正午頃出発。河が大きくカーブした
辺りから向かい風が吹き始める。波が、
にわかになくなり始めたので右岸に上
陸して様子を見る。



チャムサーモン



化石



航行中

丁度、小屋が空いていたのでそこに泊まっても良かったが、すぐそのヌラトまで行くことにする。

PM5:10ヌラト到着。

○ヌラト

人口400~500の村。アサバスカンインディアンとユピックエスキモーが混在している。

村の子供はアサバスカンの言葉を喋るし、サーモンを捌くお婆さんは「ウラック」というエスキモー独特の扇型ナイフを使用していた。

-----ここまで2221km-----

11日 一休息日一

航行日程が予定よりも遅れそうなので、グロッサリーストアの電話を借りて日本へ飛行機のチケットについての確認をする。オープンチケットなので何日にでも変更出来ることを再確認する。

春日がブルーベリーを沢山摘んできて潰してジュースにして飲んでいた。

私も飲ませてもらったが、美味かった。大変野趣あふれる味で甘酸っぱさがたまらない。あと、飲み過ぎると翌日の排泄物が驚くほど真っ黒になるということだけ付け加えておきたい。

テン場で漁から帰った人にシルバーサーモンをもらって食す。キングよりもあっさりしているが油で火を通して醤油をかけて食べるうまさは筆舌つくしがたい。

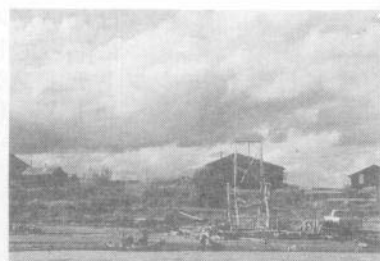
夜には、村の女の子達が遊びにきて隊員らよろこぶ。

12日 一停滞一

風強く、波が荒いため停滞。雨ではないから村を徘徊したりして過ごす。戸谷、関谷は村人の作業の手伝いをしている途中に道端ではりねずみを見つける。はりねずみは敵を脅かすことによって身を守るので動きはのんびりとしていて、昔は食用として捕らえられていたらしい。

夕方、グロッサリーを経営しているマウテン家の若夫婦が2人の小さな男の子を連れて遊びに来る。親も子も日本人のようで、とても親しみが持てた。

奥さんはエスキモー村出身で、旦那さんはアサバスカンである。子供の一人の鼻が低いのはエスキモーの血が濃いからだと言った旦那さんが教えてくれた。奥さんの方は、学校ではエスキモーの言葉や文化を教えず、よそからやってきた先生が英語圏のことはばかり教えるので子供らは英語しか喋ることができなくなっていると言っていると不満げに話す。それでも近頃はネイ



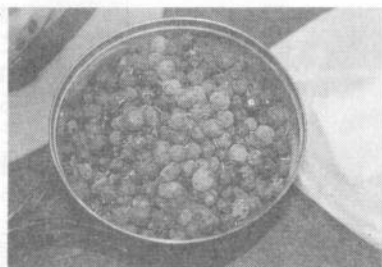
ヌラト到着



エスキモーナイフ



スモーク用サーモン



ブルーベリー



地元の女の子達

ティブの先生による教育が行われるようになってきているらしい。

我々の会話は英語によってのみなされる。大人は英語と他に自分達の言語を持っている。しかし、年齢が下がるにしたがって、英語の占める割合が高くなっていく。だから子供らに自分の種族の言葉について尋ねても知らない場合が多い。

旦那さんが我々のカヌーに乗ってパドルを漕ぐ真似をしながら「どこまで行くのか」と聞いてきたので「ベーリング海まで」というと、驚いた顔をして首を左右に振った。

確かに我々の行為は彼らにとっては全く理解出来ないことであろう。だから人に会って「なぜこんなことをするのか」という問いを投げ掛けられたときはニコリ笑って「エクササイズ」と答えることにしていた。

- 13日 一快適なテン場— C49 (25 km)
相変わらず向かい風が強く波も高いが、思い切ってでる。途中カヌーが隠れるくらい波が立ち、内心焦りながら慎重に進路を定める。今日のテン場はふかふかの草の上で居心地がいい。

☀
のち
●

- 14日 一停滞—
雨風の為停滞。悪天候が続くので動きが制限される。特に風が曲者である。午後風が止んだら出発することにしたが、結局風止まず。

☔
のち
●

- 15日 一カルタグ到着— C50 (39 km)
風が弱まったのをついて出る。PM3:20カルタグ到着、水捌けの悪そうな河原には、死んだ魚があちこちに散乱していて臭い。

☀
のち
●

焚火で夕食を作っていると、子供達がやってきて、焚火から小枝に火をとって遊んでいる。坊主頭でニカッと笑う顔がかわいらしい。

☐カルタグ

人口300の村、この村に差しかかるくらいから、季節の変わり目に入り天候の不安定な日がしばらくつづく。

-----ここまで2285 km-----

- 16日 一休息日—
昨夜、寝ているとテントがパラパラポンポンと音を立て始めた。寝呆けていたので投石(泥)と判明するまでに時間がかかったが、シュラフの中から怒鳴ると、子供達は逃げていった。

☔

- 17日 一停滞—
雨が降り続く。地面はゴツゴツしていて寝にくく、空気はジメジメして過ごしにくい。



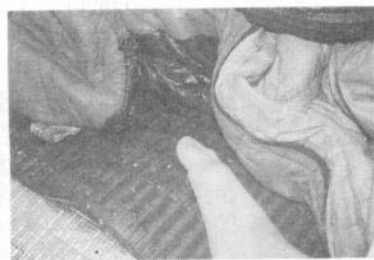
ヌラトの家族



草だらけのテン場



カルタグのテン場



浸水で濡れたシュラフ

18日

—キャビン—

C51 (39km)

グロッサリーが開くのを待って買い忘れの食糧を補充して出発。

時速5kmで進む。風がなければもう少し速いだろう。最近では波の立たない日は無く、カヌーの座席は常に上下動を繰り返している。

PM5:00右岸に開放されたキャビンを発見して上陸する。母屋が2つにスモークハウスの様な建物が1つある。小屋の中は広く、食堂以外に2つ部屋があって、板敷きのベッドが奥にある。何よりも嬉しいのは竈がついていることで、ここで料理をしたり周りで服やシュラフを乾かしたりする。

河を下っていて、服が濡れていると、気持ち悪いくだけでなく少しずつ体温が奪われてしまうので疲れてしまう。そういう意味で持ち物を乾かし、暖を取れることは結構貴重なことであった。



波間をぬって進む



キャビンに一泊する

19日

—二匹目のドジョウ—

C52 (62km)

皆、良く眠れたらしく脂ぎった顔をして起き出してきた。

キャビンに別れを告げて出発。パドルを黙々と漕ぐ隊員の頭の中には次のキャビンを目指すことしかなかった。昨日の小屋泊まりに皆味をしめていた。

今日も2、3キャビンを見付けて物色するが、時間が上陸には早かったり、鍵が掛かっていたりで適当なものがなく先を目指す。地図上のキャビンマークを人參にして馬車馬のように進む。

結局PM7:00まで漕いで良い場所なし。10時間近くで62km前進。皆、疲れ果てて、上陸するなり無言で荷揚げを始め、物凄い手際の良さで夕食の準備をする。今日は普段より2時間多く漕ぐが2匹目のドジョウはいなかった・・・。



今日もキャビンをさがす



皆無言で夕食を作る

20日

—冷え込み—

C53 (47km)

朝方は13℃と寒い。昼間も曇りの日は温度の上昇は望めない。風が吹けばヤッケを着込んでも寒い。

ムースの糞だらけの土手に上陸。

21日

—グレイリング到着—

C54 (49km)

昨日よりも一段と寒さが増し、手足が凍える。明らかに冬の接近を感じる。

昼食はカヌーの上でじっとして食べるには余りに寒く波が荒いので一時土手に上陸して、白樺の樹皮を着火材にして火を焚く。PM6:00グレイリング到着。

☞グレイリング

夕方に着いて次に日の昼に出発したので村の様子はよく分からなかったが、道であった人は陽気で親切であった。



寒さの為一時上陸して焚火をする

22日



—アンビック到着— C55 (30 km)
食糧を少し買い足してAM11:45出発。
アンビックまで30 kmなので余裕の行程
である。

久しぶりに波一つない穏やかな日である。
PM3:30アンビック到着。教会の
横にテントを張らせてもらう。

☞アンビック

本流から少し奥に入った所にある村。若
者が少なく。人口が減って行く一方だと
道行くおじさんがいていた。確かにあ
まり若者を見かけない。(幼い子供はい
るが)



アンビックにて

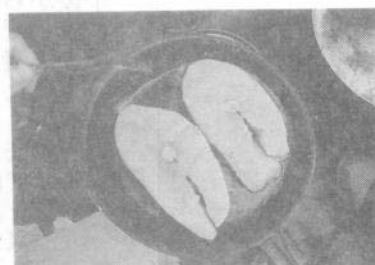
-----ここまで2511 km-----

23日



—休息日—

夜は6℃と寒い。地面には霜が下りてい
る。各自グロッサリーに行ったり散歩し
たりシャワーを浴びたりして時間を過
す。昼過ぎからパラパラと雨が降り始め
る。



サーモンステーキ

24日



—停滞—

雨で停滞。夕食はグロッサリーのおじ
さんにもらったキングサーモンのステーキ
を焼いて食べる。

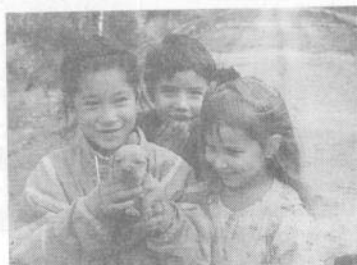
25日



—危険な波—

C56 (10 km)
本流にでると間もなく、大きな波のうね
りに巻き込まれる。20 cm位に見える他
艇は木の葉の様に見え隠れしている。

波のトップからボトムまで2 m近くあ
るだろうか、見ているだけで怖い。転倒
しないようになるべく波に真っすぐカヌ
ーの舳先をあてながら徐々に岸に近づき
一時避難する。アンビックから1時間程
進んだ地点である。食糧用テントを立て
て待機するが天候回復の見込みはなくこ
こに1泊する。



アンビックの子供達

—恐しい太陽—

7月は燃える様な太陽に肌を焼かれながら暑さを呪ったものだ。
8月中旬からは強風と雨に悩まされる。気温は10℃近くまで
下がり、体を震えさせる日が増える。

日も短くなり、PM9~10:00にはすっかり暗くなり始め
AM1:00頃には真っ暗になる。今は調度レイニーシーズンで
もっとも天候が荒れる時期らしい。

まさか同じ時期に日本が史上最高の夏地獄に苦しめられてい
ようとは夢にも想像できなかった。

26日



—ホリークロス到着— C57 (56 km)

少し波もおさまり、漕ぎ易くなる。

PM6:00一旦上陸して夕食を摂って
再びカヌーに乗り込みホリークロスを目
指す。テン場がないのに行ける時に距離
を稼ごうという考えからである。

PM9:10到着、虹が遠くに架かって
美しいが、もう日は暮れかけである。



ホリークロスにて

体を震わせながらテントを立てる。

-----ここまで2578 km-----

27日 一休息日一

のち

遠くの山には初雪がふったらしくほんのりと雪化粧している。
テントに村人がスモークサーモンを売りにきたので1ポンド(約450g) \$10のものを有志で購入。

28日 一パドリング日和一 C58(80 km)

久々の晴天、風もなく最高の朝だ。1時間10 kmのハイペースで進む。

午後から雲一つなくなり快晴。漕げるだけ漕いで8時間で80 km進む。

夜真っ暗な空のしたで焚火を囲んで話をしていたら突然周りが光り、空を真っ二つに裂くような緑色で極太の閃光が夜空を走り去った。普通の流星の10倍はあったのではないだろうか。

29日 一ルシアンミッション一 C59(38 km)

のち

朝一段と寒さを増して、底冷えといった感じだが、追い風なので調子よくいけそう。PM2:00ルシアンミッション到着。

ルシアンミッション

テントを張ってしばらくすると、子供らが遊びにやってきた。隊員の背中に飛び乗ってみたい、帽子をとって逃げてみたい、とても人懐っこく元気だ。

夕食のチリパスタと一緒に食べる。食器を貸したら、ちゃんと洗って返しにくるなど礼儀正しくもあった。

夜、ハンターに捕ったばかりの鴨をもらい自分達で羽をむしるところから捌いて食べる。生々しい死体にナイフを入れながら必要以上に生き物をころしたくないものだと思う。

焼いてから謹んで食す。砂肝がおいしかった。

-----ここまで2696 km-----

30日 一悪天一 C60(16 km)

傘

昼食を摂って出発。小雨が段々きつくなる。PM4:30中洲に上陸。

31日 一停滞一

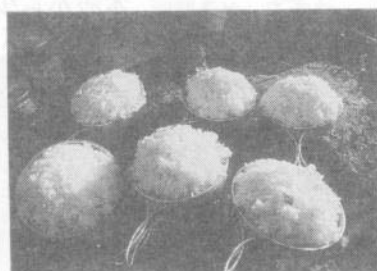
傘

雨で停滞。飲料水が底をつきそうだったが、高木の機転でカヌーに溜まった雨水を料理にまわすことにする。

9月 1日 一マーシャル一 C61(70 km)

のち
傘
のち

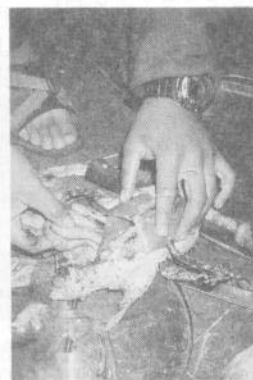
「うわっ! タワシや」という声で目が覚める。朝食を摂りに食糧用テントにいくとナッツの大群に囲まれる。半ズボンのため露出した足に群れるナッツはまさに「タワシ」そのものであった。朝食のラーメンにも何匹か浮いているが今さら声



これでも足りない御飯



子供達と一緒に夕食



かもをさばく



ソリ用の犬

を立てる気にもならない。さっさと食事を済ませて出発する。

今日ユーコン最南端部を通過する。ここからユーコンデルタと呼ばれる巨大三角州に沿って北上すると間もなくベーリング海である。PM6:00マーシャル到着。

☐マーシャル

河から見ると、土手に何十匹という犬が繋がれている。冬期には橇をひくための重要な役割をはたす。顔付きも鋭くオオカミのような犬もいる。



ソリ

-----ここまで2782km-----

2日 一休息日一

近くの低い山に上りに行く。遠目にはオレンジや緑色が混ざって綺麗だが、足を踏み入れると苔が一面に生えた湿地帯でくづしの辺まで水に浸かってしまう。

3日 一出発一

C62(27km)

PM3:00から出発。PM6:00に上陸



所々に流木が突き出している

4日 一パイロットステーション一C63(50km)

高い波の中を必死に進んでいるとエスキモーの男性達の乗ったモーターボートが横に来て大丈夫かと聞いてくれる。ボートから見れば、カヌーは甚だ心許ないものに見えるのだろう。

PM4:00パイロットステーション着。

☐パイロットステーション

夜中悪ガキに何十本ものロケット花火と爆竹をテントに打ち込まれる。朝起きて見ると夥しい量の燃えかすと共に熱で溶けた防水袋を発見した。



パイロットステーション

5日 一エスキモーウィスキー一 C64(34km)

起床して食糧用テントにいくと見知らぬ女性が中で座っていた。朝食当番の戸谷と藤巻の話では自家製のお酒をビンに詰めて持ってきてくれたらしい。

先に起きた春日は外で小用をたそうとした所、すでに用たし中であつた彼女と正面から出会ってしまいしきりに「ソーリー」を繰り返しながら照れていた。

しきりに勧めてくれるので飲んでみる。イーストの香りのよくする酸味の効いた飲みものといった感じでさらさらと胃に入ってくる。

ほろ酔いで出発。PM3:00ピトカズポイント到着。(ここは計画上では停泊の予定はない)

村を散歩していた戸谷は村人の家に招かれムースの肉を食べさせてもらったらしい。しっかり火が通っていたらしく固



好奇心一杯の子供たち



手造りウィスキー

くて独特の臭みがあったが、美味しかったらしい。

6日 —マウンテンビレッジ— C65 (30 km)
3時間でマウンテンビレッジ到着。

● 200m位の山に登って河を見下ろすと、アラカナックにむかって蛇行する流れの全容を目にすることが出来る。

☐マウンテンビレッジ

ロシア人がベーリング海からユーコン河を溯って来た時に初めて見た山がこの山だったらしい。



ユーコンを見下ろす

-----ここまで2923 km-----

7日 —休息日—

とき
とき
傘

夕方、バージ (ユーコン川流域に暮らす人々の生活物資を補給にくる貨物船) がきて燃料や食糧を村に置いていった。

8日 —アラカナックへ— C66 (40 km)

● 一面霧の中を出発。しばらくして向かい風によって波が立ち始める。寒い。

PM5:00左岸に上陸。

9日 —最後の晩餐—

●
のち
傘

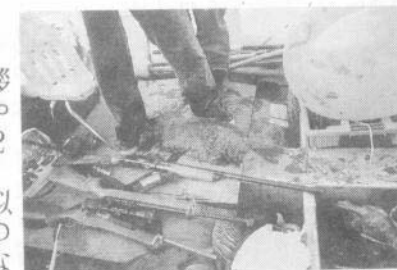
鴨の群れや白頭ワシを眺めながら進む。右岸のスルーに入って上陸。

夕食後ボートが通り掛かったので挨拶を交わして近寄ると、中には白鳥や鴨やアザラシなどが横たわっている。全部2りで捕って来たらしい。

シスコというホワイトフィッシュに似た魚を (同じかもしれない) もらったので塩焼きにして食べる。日本が恋しくなるぐらいおいしかった。



バージ



エスキモーに捕獲されたアザラシ

—(ば)かブネ—

カヌー3艇のうち1艇は新しく購入された他の2艇とちがいが、随分使い続けられていたので、1日の航行中に少しずつ空気が抜けるので毎朝ポンプで空気を注入しなくてはならない。

シフトチェンジごとにジャンケンでカヌーを選んでいたが、高木だけは最初から最後までこの古いカヌーに乗ることになってた。安定性はいいのだが、いまいちスピードに欠けるところがあるこのカヌーに時々愚痴をこぼしながらも高木は我慢して乗り続けていた。

そんな高木も明日航行が終わることに気を良くしたのか、「このばかブネとも明日でお別れか」とお世話になったカヌーに対して無体な言葉をかけて笑っていた・・・。

10日 —アラカナック・航行終了— C68 (20 km)
波ひとつ無い用意されたような水面を滑るようにして進んで行く。航行の最後を飾るには最高のコンディションである。月並みな言葉で言えば嬉しいような淋しいような気持ちでパドルを動かす。

最終目的地アラカナック手前の中洲に上がって記念撮影をする。昼食を摂ってあとはアラカナックに入るだけだ。



最後の船出

カメラをしまいながら、ふと先にカヌーに乗り込んだ春日と高木を見るとなぜか解らないが、前に乗っている高木が頭から河に落ちるのが見えた。しまいかけたカメラを再び取り出して見ると、今度はカヌーが丸ごとひっくり返り、春日も河に浮かんでいた。

とりあえずいそいで撮影を済まして流れそうな荷物を回収に行く。

本人達はすぐ陸に上がった。話を聞けば、まず高木が落ちて（原因は不明）カヌーに昇ろうとしたときにひっくり返ってしまったらしい。

2ヶ月前の4人の転覆時に「俺は絶対転覆はしない」と断言していただけに最後の最後に沈してしまったことが悔やみ切れないらしく、しきりに高木に流し目を送っていた。

この沈に昨日の高木の発言が影響していたかどうかは定かでない。

○アラカナック

「間違った道」という意味のこの村の名はもう一つの河口の村エモナックに対して付けられた。今では大きくなりアンカレッジまでの飛行機もでている。

-----ここまで3034 km-----

村に到着して、荷物をまとめカヌーを洗い、帰国の準備をする。

ーオーロラー

夜、藤巻と高木が外で焚火をしながら村の子供らと話をしている。他のメンバーはテントの中でシュラフにはまっている。

少し外が騒がしいかなと思っていると、高木がやってきて、「オーロラがでてますよ」と教えてくれた。

テントから顔だけだして空を見てみると、初めはわからなかったが、目が慣れてくると、北東の空にうっすらと緑色の帯が揺らめいている。ごく淡い光りだが確かにオーロラである。

しばし見とれて時間を忘れる。アラスカの空が最後に見せてくれたオーロラは3000 km航行終了の良い思い出として各隊員の胸に残ることであろう。



航行終了



最後に転覆



カヌーをたたむ

11日

ーアザラシ漁ー

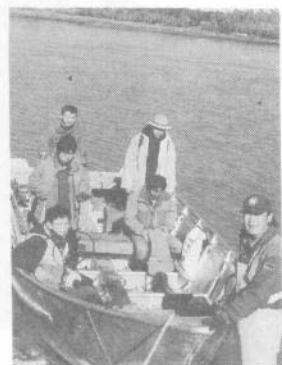
昨日知り合ったロンという若者のモーターボートでアザラシ漁に連れていってもらう。ガソリン代は我々持ちである。

河を少し溯り、サンシャインベイというところでガソリンを購入する。そして、一路海へ。

海に近づくにつれ、水平線が広がっていく。時々ブルーガ（白クジラ）が水面に頭を出す。

満潮を待つために中洲に上がっていると所々にブルーガの頭や背骨の化石が落ちている。

大分水かさが上がったので再出発して



アザラシ獲りへ

アザラシを探しに行くが、いない。漁自体あまり切迫感はなく生活の為というよりは楽しみの一つとして行われているという印象を受けた。

随分走り回って、いい加減寒くなり始めた頃、波間にひょっこりとアザラシが丸い頭をだした。しかし、すぐ水面下に隠れてしまう。

体を震わせながら、テン場に帰りついた時にはもう日は暮れて、皆空腹である。暗い食糧用テントのなかで昨日もらったムースの肉をフライパンで焼いて食べる。



満潮を待つ人々

12日 ー日本食パーティーー

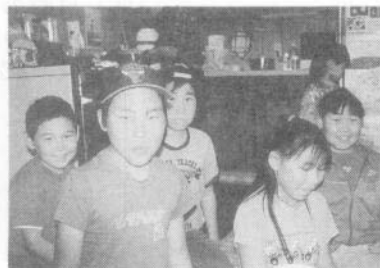
PM1: 0.0村のサウナで汗と垢を流す。石を焼いておいて、その上に水をかけて蒸気を上げさせるスチームサウナである。

テン場にやってきたカリフォルニア出身でこの村の小学校の先生のカレンさんの家に招かれ、夕食をご馳走になる。

家に入ると、既に数人の小学生が遊んでいた。

我々に興味があるらしく、目を輝かせて色々話かけてきてくれる。

先生の料理はワサビ入りのタクワン手巻や煎り豆腐など長旅に疲れた日本人泣かせのもので大変美味しかった。(彼女は日本食ファンらしい)



アラカナックの小学生

13日 ーさらばユーコンー

PM2: 3.0村外れの飛行場から双発機でアラカナックを発つ。エモナック、マーシャルを経由してアンカレッジへ。

上空から見たアンカレッジの街は既に電灯で照らし出されていた。空港の硬いコンクリートに飛行機が車輪を降ろしたとき「遠征は終わったんだ」という実感が初めて心のなかに湧いた。



アラカナックの飛行場